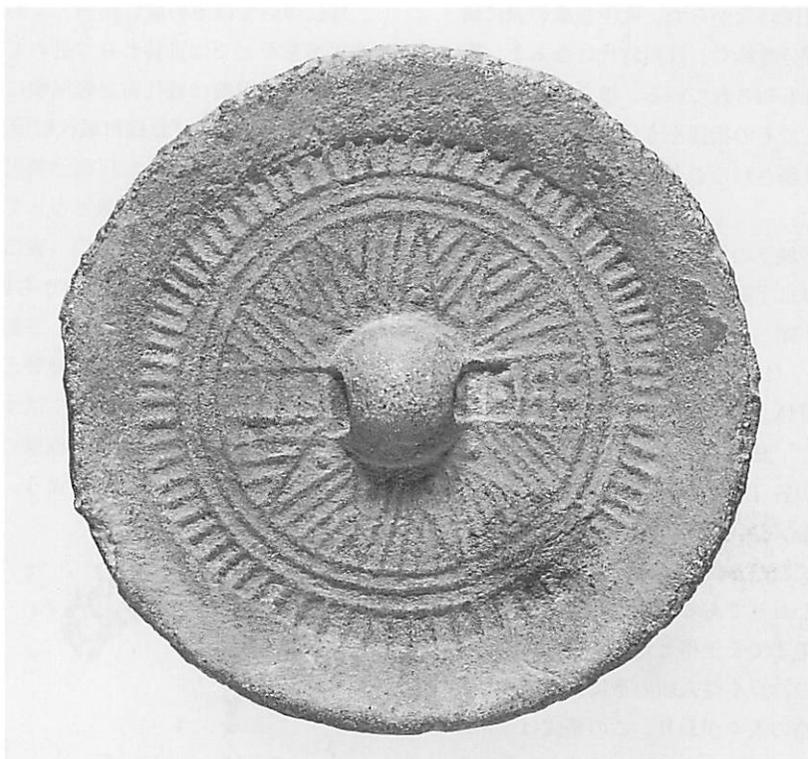


大 博物館だより

1993.4
No.9

津山郷土博物館



鋸歯文鏡 津山市樋ノ内池南遺跡出土 館蔵

津山市大篠の樋ノ内池の南で、昭和初年頃工事中に発見されたものである。残念ながら出土状態が不明で、どのような遺構に伴うものかはわからない。

日本製の鏡で、直径84mm。鈕は半球形の素鈕。内区は鈕孔方向に梯子状の文様を配し、その両側に各5個の細線鋸歯文をおく。各鋸歯文間には小珠文をおき、また梯子状文の一方にも1区画2個ずつの珠文を配す。内区外周は2条の素文帯と櫛歯文帯からなる。外区は平縁で素文である。

この鏡の文様は他に全く類例のない特異なものである。高倉洋彰は、これを中国の双頭龍文（位至三公）鏡を模した弥生時代の小形仿製鏡とする（高倉洋彰『日本金属器出現器の研究』1990年）。また樋口

隆康も弥生時代の朝鮮製の多鈕細文鏡との共通性を指摘する（樋口隆康『古鏡』1979年）。一方、内区外周の櫛歯文の形状から、これを古墳時代の仿製鏡とする意見もあるが、この説では内区文様の祖型がうまく説明できていない。

この鏡が出土した大篠樋ノ内池の南は、標高約200mの谷奥にある。地形上、古墳や弥生時代の墓地が存在したとは考えにくい。あるいは、何らかの祭祀遺跡に伴うのであろうか。現在では、厳密な出土地点や出土状況を確認するすべもない。当館では、この鏡を一まず古墳時代説にたって展示しているが、色々謎の多い鏡といえよう。

津山城下の同心組

江戸時代、津山城下町には「同心」と呼ぶ人々がいた。実態は別として、日頃のテレビドラマで目にすることもあり、潜在的な概念があるろうが、今日の警察官と類似した職と考えてよかろう。ここでは、同心の身分的地位やその職務を紹介することとする。

同心の呼称は戦国時代からで、武士組織の頭に属する下級武士の身分呼称で、江戸時代になると、町奉行所の同心が最も知られている。彼らは町奉行配下の与力に分属してその指揮をうけた。一代限りの奉公であるが、世襲されることが多く、俸禄は30俵2人扶持であった。

津山では、日常城下の治安に勤めており、支配機構や、人数・俸禄は下記のようになる（天保期）。

- 同心組小頭（1名 4石2人扶持）
- 書役（1名 3石5斗2人扶持）
- 町奉行 部屋目付（2名 扶持1名につき同上）
- 同心（11名 扶持1名につき同上）
- 半番（2名 1名につき3石5斗2人扶持）
- 三軒屋番（2名 1名につき7俵2人扶持）

同心たちの藩における地位・身分をみると、俸禄は表(2)のとおりである。津山藩では、格式が小従人組から家老までを士格と定め、俸禄は5石3人扶持以上であった。小従人組の下に大役人・小役人・歩行・坊主格の人々があり、この格式は士格には入らない。さらにこの下に足軽・仲間があり、同心小頭が歩行・小役人格、同心が足軽・仲間とほぼ同格と考えられる。同心から昇進した者としては三船藤四郎がいる。藤四郎は享和元年(1801)召抱えられ、しばらく見習として勤め本役となった。文化8年(1811)9月1日に小頭となり、嘉永4年(1851)正月16日「数十年無怠実体相勤候付格別之訳を以御徒」に召出され、6石3人扶持を与えられ、「新参御役人」家となる。50年勤めたうえの昇進であった。

同心として召抱えられたものの出身は、その大半が「由緒ある者か、「又者」と呼ばれる陪臣（家臣の家来）であったり、半番から転職する者も多かった。一代限りの者が多く、免職後の動向は不明である。また、親子代々にわたって勤める者は、三船藤四郎の子平助その他は希であった。

日常の職務は2人一組が交替で勤めるが、担当を決めたものとして

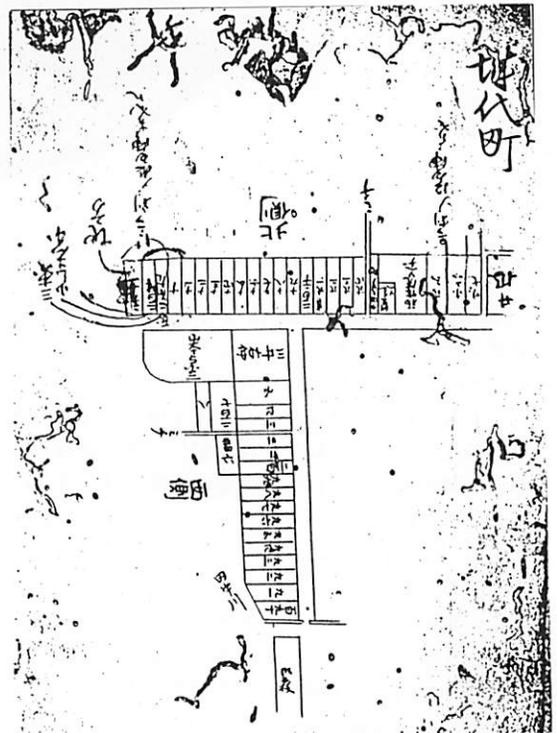
- 博奕・盗賊宿改係
 - 不業跡・不人情者の家業取調係
 - 旅宿人改係
- がある。また、

津山藩主が参勤交替で津山を出立するとき
松江の藩主が参勤交替で津山を通過するとき
大隅・徳守神社祭礼の御輿・野台の付添
等についてはその度に割当てており、数日に及ぶ芝居興業などでは日替わりで勤めている。

同心の組屋敷は城代町足軽屋敷にあった。次図は文化15年(1818)の『鉄砲町城代町屋舗番附間帳』で、190番から223番のうち12区画が割当てられており、他所も同心組と同格の屋敷となっている。この敷地一区画の広さはおおむね間口（表口）が2間5尺余から3間2尺余、奥行は10間半から13間余であった。屋敷の規模や間取は不明だが、三船藤四郎が東西5間余南北3間半の家を後年に建替えている。

同心という役職は、城下に生活する町人にとって身近な存在であろうが、藩の機構のなかでは身分的地位は非常に低いものといえよう。

（神尾 斉）



鉄砲町城代町屋舗番附間帳 館蔵

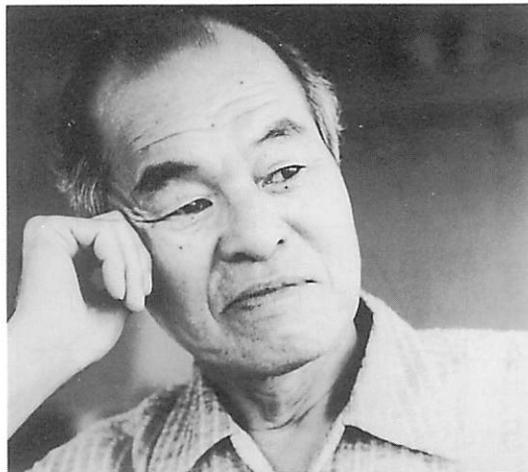
棟田博は明治41年(1908)英田郡倉敷町大字倉敷(現英田郡美作町林野)に伊藤家の二男として生まれる。大正7年(1918)母の生家苫田郡津山町大字西新町(現津山市西新町)棟田家の養子となる。神戸市の中学校を卒業後、数年間津山で過ごしたあと上京。早稲田大学文学部国文学科に学びながら、小説を志す。

昭和12年(1937)日中戦争(「支那事変」)に応召し、翌年江蘇省台児荘の戦いで負傷して帰還する。昭和14年(1939)長谷川伸のすすめにより、その時の体験を素材とする小説『分隊長の手記』を発表し、大衆小説家として出発する。昭和17年同じ戦争体験を作品化した『台児荘』で野間文芸奨励賞を受賞。

戦後も一貫して戦争文学を追求し、『サイパンから来た列車』(昭和30年)、『拝啓天皇陛下様』(昭和37年)など数々の名作を世に出す。また、『美作国吉井川』(昭和46年)、『そして、お犬小屋が残った(原題・悲風百里)』(昭和52年)、『宮本武蔵』(昭和51年)など郷土美作を素材とする作品も多い。

昭和42年から62年まで神奈川県茅ヶ崎市教育委員として、地域の教育行政に貢献したことも特筆すべきであろう。昭和63年4月30日79歳で没。

この展覧会では、棟田博の作品とその関連資料を展示し、郷土出身のすぐれた大衆小説家の人と文学を回顧しようとするものである。



棟田 博 棟田小夜子氏提供

その他の主な発表作品

- 『続・分隊長の手記』 昭和14・15年
- 『中華理髪店(原題・短髪器)』 昭和16年
- 『北京恋ひ』 昭和22年
- 『黄天』 昭和29年
- 『風流剣人伝』 昭和30年
- 『地と影』 昭和32年
- 『生と死の間に』 昭和33年
- 『拝啓カアチャン様』 昭和38年
- 『ああ昭和(原題・拝啓鶴亀様)』 昭和42~44年
- 『ハンザキ大明神』 昭和44年
- 『桜とアザミ』 昭和48・49年
- 『昭和浪漫詩人物語』 昭和59年
- 『教育元年のドン・キホーテ』 昭和59年

平成5年度津山郷土博物館友の会入会の御案内

より多くの人たちに博物館を利用していただくために、津山郷土博物館では、次の要領で「津山郷土博物館友の会」の会員を募集します。

1. 会員になると……………

- (1)津山郷土博物館の常設展・特別展・企画展が無料で観覧できます。
- (2)博物館主催の「美作の文化財めぐり」(年4回開催)に参加できます。
- (3)「博物館だより」(年2回発行)や講座・講習会など博物館に関する情報をお知らせします。
- (4)津山洋学資料館・津山弥生の里文化財センターの入館料が割引されます。

2. 会員になるには……………

- (1)申込資格 どなたでも会員になれます。
- (2)会費 一般1,000円、中学生以下500円です。
- (3)申込方法 住所・氏名(フリガナ)・性別・年齢・郵便番号・電話番号・会員種別を記入して、直接か郵便で博物館にお申し込みください。
- (4)申込期間 平成5年4月1日から平成6年2月28日まで。
入会手続きが完了しますと、会員証をお渡しします。

平成5年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	村 古 文 書 講 座 争 い	古 代 史 講 座 美 作 の 木 簡 を 読 む	夏 休 み 子 供 歴 史 教 室 弥 生 土 器 を つ く る	美 作 の 文 化 財 め ぐ り (友の会)	江 戸 一 目 図 屏 風 特 別 展 示
H5 3	3.6 企画展 弥生時代の村					
4	4.18					
5	4.21 企画展 棟田博 5.23	● 5.12				
6		● 5.26	● 5.18		● 5.23	● 5.26
7		● 6.9	● 6.15			● 6.26
8		● 6.23	● 7.20	● 7.22・23		
9		● 7.14		● 8.17		
10	10.2 特別展 浅本鶴山の陶芸	● 7.28				
11	11.14	● 9.8	● 9.21		● 9.15	
12		● 9.22	● 10.19			
H6 1		● 10.13	● 10.19			
2	2.11 企画展 大谷碧雲居	● 10.27	● 11.16		● 11.14	● 11.17
3	3.16	● 11.10				● 12.17
4	3.19 企画展 中国古代拓本展 4.24	● 11.25		● 1.18		
			● 2.15		● 3.6	
			● 3.15			

<博物館入館案内>

- 開館時間 午前9:00~午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日~1月4日 その他
- 入館料 小・中学生 100円 (80円)
高校・大学生 150円 (120円)
一 般 200円 (160円)
※ () は30人以上の団体

大 博物館だより No.9

発行年月日 平成5年4月1日
編集・発行 津山郷土博物館
〒708 岡山県津山市山下92
TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874
印刷 (有)弘文社

大 は、旧津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章である。